

た。南口駅発最終の軍用列車に便乗して北京に向かった。

北京に到着して私は次長達と別れ叔父宅に行った。深夜、宣化駅を発車した妻子をのせた無蓋列車は、まもなく大雨に見舞われ、皆ズブ濡れになり、家内は死人の如く横たわり、独身の坂本警務指導官に介護され、同車中の乳の出る人から貰い乳をして貰っていたが、やがて乳をくれていた人も乳が出なくなり、坂本君がつくつてくれた人工乳でどうかしのいでいたらしい。大小便等も鉄の梯子から地上に降りて始末しなければならず、産後間のなかった家内は、それが最大の苦しみだった。かくて列車が進むうち、引揚げ列車の先行をしていた日本軍の装甲列車が、宣化県懷来駅付近で、八路軍の襲撃にあり、さいわい死者はなかった模様だが、線路が爆破されたので、それを修理して出発、翌日午後三時頃北京に到着した。

親類、知人等のない大部分の引揚げ者は天津の芙蓉小学校、松島小学校に收容されて苦難の共同生活をした後、天津の旧日本軍の貨物廠に移されたが、私たちは、

直接貨物廠に收容された。筆舌につくしがたい苦難の收容所生活の後、博多港に着いたのは十二月十五日であった。

青雲の志を抱いて渡航そして引揚げ

福島県 神事 重人

友にすすめられ、北京にあった電力鉦業㈱に応募し渡航したのは、十二年四月だった。この会社は発電所、変電所の工事と機械工具の販売をしていた。私は、販売部に勤務し、昭和十三年、太原市に出張所開設、昭和十四年五月から十六年十二月まで太原に勤務、この間、日本通運のタイピストだった妻と結婚し、北京転勤、十七年長男出産、妻の両親のもとへ旅行し、北京へもどったら、重要産業要員だから訓練校へ入所のことと総領事館の命があった。

三か月あまりの軍事訓練後、日鉄鉦業武安鉦業所に配属、太行山脈の巨大な鉄鉦石の山に入った。不足した鉄

鉾石の採掘が目的であった。ここは、重慶から日本空襲の通路で、B 29 が三十機、五十機と東京に行くのがよく見えた。西方は八路軍の地区で、なんとか夜襲を受けた。夜は常に非常態勢であった。日本の敗戦は、九月中旬に判明、周囲は包囲されており、夜半十二時に駐屯軍と避難した。石家荘から北京に至るまで二週間ほどかった。

わが家に帰って数日後、国民党の軍人が五、六人、土足ではいり、現金、貴金属を持ち去った。その後、身のまわりの品を持ち、北京郊外に移住し、ここで三男をぶじ出産した。昭和二十一年一月頃まで生活し、引揚げのため、天津タンク埠頭の貨物廠に収容された。一世帯三畳のスペースにゴザ敷きで、一日二回の食事で非常に粗末だった。一か月ぐらいここで暮し、三月末に L S T で山口県の仙崎に向かう。

三男が船中で肺炎となり、仙崎から福岡の妻の実家へ落ちついた。私は肝臓黄疸となり、約六か月世話になった。妻の実家は農家だったし、近所の農家から野菜を仕入れ、行商を始めた。そして、保険のセールス、建設会

社の現場事務員等できることはなんでもやらなければ食うことができなかった。

ところが妻が肺結核を発病、二年後に死亡してしまっただ。新しい出発のため、子どもたちを親戚縁者にあずけ、上京し、消化器メーカーのセールスになり、その後代理店を開設し、渡航から実に二十年を経過してなんとか生活の安定をみることもできた。

今思うことは、あの大戦で、多くの戦争犠牲者が出たなかで、せめて重要産業要員として国に奉仕できたことと、生存して今日あることは、さいわいであると思つてくと思う心境である。

引揚げ時に、お金と食料をくれた人

岐阜県 中井 千秋

昭和二十年八月十三日、親しい中国人から、日本は降伏した、と聞かされたが、半信半疑で、そう不安はなかった。しかし八月十五日終戦の詔勅の放送があつてか